

## 戦時下の上海における田村俊子の声

— 雑誌『女声』の「信箱」をめぐる —

はじめに

一九三六年三月に、田村俊子はアメリカから日本へ戻った。カナダで社会主義に目覚めた俊子が十八年ぶりに見た日本は、ちょうどファシズムへ移行していく時期にあった。俊子は「小さき歩み」（『改造』一九三六年十月）、「残されたるもの」（『中央公論』一九三七年九月）など、労働者と下層階級の辛さを暴く作品を描き、日本の現実へ迫りつこうとする努力を示した。しかし、どの作品も評判がよくなかった。一方、日中戦争勃発後、日本政府の要請を受け、多くの作家が「職域奉公」として従軍した。俊子は「従軍文人におくる 力の文学を！」（『帝国大学新聞』一九三八年九月十二日）で従軍作家の活動を称賛し、同年十二月には中央公論社の特派員として中国へ赴いた。

一九四一年十二月、太平洋戦争勃発を契機に、上海は全面的に日本の軍事占領下に入った。汪精衛国民政府と日本軍部は上海での宣撫や文化工作を考え、『古今』『風雨談』などのプロパガンダ雑誌を作った。<sup>(1)</sup> 華字婦人雑誌『女声』もその中の一つである。そして草野心平の推薦により、田村俊子は女声社の編集長になった。雑誌『女声』は一九四二年五月十五日から一九四五年七月十五日まで、三巻合計三十八冊を発刊

している。

田村俊子は中国在住時代当初、日本国内へいくつかの文章を投稿したが、雑誌『女声』創刊後、俊子は『女声』に力を注いでいたため、他の雑誌への投稿は一つしか確認できない。ゆえに『女声』は晩年の俊子の活動と思想を探るための一番の資料だと言えよう。しかしながら、俊子が自分のペンネームで『女声』に発表したものは、劇評の四点しかない。そこで研究者たちは『女声』の読者投書欄——「信箱」に着目した。草野心平との会談で、会田綱雄は「信箱」について、「田村さんが全部一人で書き、答えてた」、「英語に翻訳してもらい、真剣に考えて、例のカナダなまりの英語で、かんで含めるように言って、閑露に中国文にさせていた」と述べている。ゆえに、晩年の俊子の思想をみるには、まず「信箱」を見るべきであろう。

『女声』に関する研究は近年徐々に増えてきているが、まだ包括的な研究が多く、具体的な内容についての研究は稀である。『女声』の「信箱」というコラム欄についての先行研究は、管見の限り山崎真紀子の論文のみである。山崎真紀子は中国人に「信箱」の内容を翻訳してもらい、その中の代表的な手紙を紹介し、解説している。そして、山崎は「（「信箱」は―稿者注）俊子一人が担当していたといわれているが、「私」で

張 備

はなく「私たち」として読者との交流をはかった」と評価している。<sup>(4)</sup>しかし、山崎の論文は「信箱」の内容説明にとどまり、『女声』の読者層および俊子思想との関連について分析しきれていない。また、「信箱」の内容の分類と統計もまだ不十分である。

従来の研究では、『女声』は女性解放の雑誌、そして俊子が中国婦人を封建思想から独立させるための実践の場として捉えられていた。<sup>(5)</sup>しかし、実際に『女声』と俊子の主張がどこまで中国の女性に伝わっていたのか、俊子がどのように中国の女性を助けようとしたのかという点については、より詳細に分析する必要がある。

本稿では主に『女声』の「信箱」投稿と回答の内容から『女声』の読者像と編集者の姿勢を分析し、「信箱」における俊子の中国女性解放への努力と、当時の上海における雑誌『女声』の意義を考える。

## 一 「信箱」と『女声』

一九四二年五月十五日、婦人雑誌『女声』は上海で創刊された。創刊号には「評論」、「世界知識」、「婦人と職業」など、十三のコラムが設けられた。「信箱」は『女声』創刊号からあったのではなく、第一巻第四期から始まった。しかし、創刊号の「余声」(編集後記にあたる)には「信箱」への言及がある。

次号から本誌は「信箱」というコラムを設置する予定である。私たちの主旨——女性が声を上げる——を実践するため、読者たちからの手紙を集めて、その中の良いもの掲載する予定だ。私たちは皆様が

積極的にこのコラムに投稿するのを願っている。しかし、ルールを決めないといけない。

(一) 楷書か行書で書き、紙のおもて面のみ使用すること。

(二) 名前と住所は偽らない。掲載する場合はペンネームでも構わない。

(三) 内容は女性に関する問題に限る。掲載するかどうかに関わらず、受け取った原稿は一切返送しない。(『女声』第一巻第一期)

つまり、創刊の最初から編集者たちには「信箱」を設置する考えがあった。その目的は、女性の声を世間に発信していくためである。しかし、「信箱」は第一巻第二期、第三期には現れなかった。第二期の「余声」に「掲載原稿が多すぎて、「信箱」は来月に譲る」と理由が述べられている。第三期には「信箱」がまだ始まってない理由についての言及はないが、おそらく第二期と同じ原因であったということが第四期の「余声」から窺える。「信箱」が現れた第一巻第四期の「余声」では「掲載原稿が多すぎて、仕方がなく、今月は一頁のみ掲載した」と、「信箱」コラムの掲載量について述べている。「信箱」は第一巻第四期(一九四二年八月)に誕生してから、第四巻第二期(一九四五年七月)<sup>(6)</sup>の『女声』停刊に至るまで、ずっと好評で一回も中止されたことがない。また、興味深いのは、「信箱」が誕生した第四期に俊子の劇評が消えているという点である。おそらく俊子は「信箱」と『女声』の編集に集中したために劇評を書く余裕がなくなったのであろう。

ところで、日本軍部と汪精衛国民政府から援助をもらっていた『女声』は、創刊当初の読者数は多くなかったことも予想できる。応景襄<sup>(7)</sup>の

インタビューに、次のような評価がある。

『女声』の字体は中国の出版物の字体とは明らかに異なっている。見ればすぐに日本側が出資した雑誌だとわかる。故に、『女声』が反日思想を持つ読者と作者を失うことは当然のことである。(中略) 私が初めて『女声』を見たときに、すぐにその字体とレイアウトから、それは日本人が作った雑誌だということがわかった。だから私は好きではなかった。少なくとも私が通っていた中学校の同級生たちは『女声』をあんまり読まなかった。<sup>8</sup>

反日思想を持っている読者や作家は『女声』から遠ざかっていった。また、そもそも婦人雑誌と定義された『女声』は総合雑誌や文芸誌に比べて読者数が少ないのも当然のことである。では、「信箱」に掲載された多くの手紙が、女声社によって偽造されていたという可能性はあるのか。実は、『女声』第二巻第十二期の「信箱」には「不意に貴誌の「信箱」で自分の名前が載っているのを見つけた。しかも事実と違うことが書かれている。私はそれを見て非常に悲しかった。なぜ純潔な女性がそこまで人に誹られるのか」、「私は常州の学校に通っているけど、己の本性を守り、よその知らない人とは一切接していない」と、自分の名前と個人情報「信箱」で盗用されたことを訴えている手紙がある。つまり、個人情報が盗用されて「信箱」への投稿に用いられているケースは確かにあった。しかし、このような内容の手紙はこの一件しかない。それに、もし女声社の編集者たちがこの手紙を偽造したのだとしたら、実在の個人情報（しかも上海在住ではない人の個人情報）は使わないもの

と考えられる。また、わざわざ告発の手紙まで掲載して雑誌のイメージを悪くするはずもない。さらに、「信箱」欄を全体的に見ると、それぞれの手紙は個人情報だけではなく、口調や文体までも異なっている。以上から、編集者が偽造した可能性は低いと考える。

また、『女声』は反日思想を持つ人々を読者層から失っているが、その発行量は悪くなかった。『女声』の具体的な発行部数については「五、六千冊」<sup>9</sup>という見解と「二万冊超えている」<sup>10</sup>という見解の二つがある。当時かなり売れ行きのよかった文芸誌『万象』と『雑誌』は一万ぐらゐの発行量<sup>11</sup>だったということを考えると、婦人雑誌『女声』の平均の発行量は五、六千冊の方が実際の数と近いであろう。当時、雑誌運営を維持するためには少なくとも千冊以上の発行量が必要だったと言われているので、『女声』の売れ行きは決して悪くない。『女声』は当時の中国においてそれなりの読者を獲得していたはずである。読者から数多くの投稿があっても不思議はない。

読者との交流欄を設置したのは『女声』から始まったものでもないし、『女声』だけのやり方でもない。『女声』以前の婦人雑誌や文芸誌も読者交流欄を設けていた。さらに、田村俊子主宰の『女声』は王伊蔚主編の雑誌『女声』（一九三二年—一九三五年）を剽窃したと言われているが、この王の雑誌も「信箱」コラムを設置していた。しかし、俊子の『女声』の「信箱」コラムは他の雑誌より良い反響を得ている。紙の値段が高騰している時代に「信箱」の紙幅は創刊号の一頁から後期の四頁に増え、回答する人数は二、三人から九、十人にもなった。実に編集者たちの努力と「信箱」の人気をあらわしている数字だと言えよう。

## 二 「信箱」の読者層

『女声』の創刊号の巻頭で、「女声」の意味は「(一)女性の声(二)女性のための声(三)女性からの声」と、解釈されている。つまり、『女声』は基本的には女性向けの雑誌だと考えてよい。『女声』の読者層について、第二期の『女声』の「余声」では次のように述べられている。

私たちが「女声」を創刊する最大の目的は知識階級の注意をひくと同時に、各階級の興味を導くことだ。たくさん読者に読んでもらうために、私たちは十五、六のコラム——評論、修養など——を設置している。(中略)編集室のみんなが「女声」の読者には女性だけではなく、きつと男性もいると思っている。社会全体においての男性と女性のつながりは緊密であり、各問題も男女両性の関係から離れてはいけないので、第三期からは「女声」の範囲を広げ、女性の利益と家庭幸福に関心を持っている男性読者からの批評と意見も頂きたい。児童と女性の関係の親密さを考えて、今月号から児童欄を新設する。読者たちにはこのコラムを利用して、子供の読書への興味を喚起してほしい。これも家庭教育への一つの小さな貢献かもしれない。

右の引用から分かるように、編集者たちが想定している読者は、社会階層からみれば、主に知識階層である。性別からみれば、女性だけではなく、女性問題と女性解放に関心を持っている男性、及び子供も含まれている。また、当時上海で有名だった作家沈寂によると、「『女声』を読んでいる人がいる。知識階層の人も読んでいた」、「読者はおそらく

店員、会社員、教員が多いだろう」と述べている。

では、「信箱」投稿者のプロフィールから見て取れる読者像はどのようなものなのか。表1に整理してみた。投稿件数は全部で二百十件である。「信箱」においては、最初に読者からの投稿文がそのまま修正せずに引用され、直後に編集者が投稿文に答える形をとっている。編集者は読者に「編集先生」と呼ばれ、「編集先生」は投稿者を「名前+女士・君・先生」と呼んで回答をする。

まず掲載件数を見ると、最初の第一巻第四期の二件に比べて、第二巻は五、六件、そして第三巻は平均八、九件まで件数が増え、「信箱」がだんだん人気をえていることがわかる。

所在地を記載した投稿は少ない。しかし、内容から見ると上海にいる読者からの投稿が一番多いと考えられる。『女声』の奥付を見ると、第一巻第十期以降、『女声』は上海の本外埠総経銷処(売捌所本店)以外に、外埠分銷処(売捌所支店)として、南京、蘇州、無錫、鎮江、揚州、漢口、常州、松江、杭州、嘉興(のち北京、天津などを含めて三十二書店まで増えた)の十五書店で売られていたことがわかる。また、「信箱」の投稿者の分布としては、上海だけでなく、他の地域にも投稿者がいた。投稿者が投稿で明記した地域には北京、寧波、福州、漢口、江蘇、松江がある。投稿者の所在地は基本的に取り扱い店の所在地と合致しており、殊に上海周辺地域に集中していることが分かる。

また、年齢と性別について、二百十件の投稿の中で、本人の年齢に言及があるのは八十二件であり、うち十代は三十人、二十代五十一人、三十代は一人である。年齢がはつきりとわかる範囲で一番年少の投稿者は一五歳だが、それより若いと見られる小学五年生の投稿もある。性別

の記載があるのは百八十八件であり、うち男性は五十三件である。男性の声は第二巻第七期から現れる。しかし、第二巻第十期に、「第二巻第七期を読んで、編集者たちは性別に関わらず、全ての青年たちの悩み聞いてくれていることを知り、本当に嬉しい」というような読者の発言があることからみれば、男性読者は第二巻第七期より前からいたことがわかる。故に、編集者たちが「余声」で想定した通り、『女声』の読者には男性も女性もいる。しかも男性の投稿件数から見ると、男性読者の数はかなり多いはずである。

学歴を見てみると、小学と中学程度の学歴を有しているのは四十一件で、高校と大学は十七件である。職業は学生が一番多く二十四件もあり、その次は普通の職員と教員（十七件）である。他に見習い六人、商人四人、工場労働者三人と舞女二人がいる。また、自分の家庭環境について触れた人もいる。かなり裕福な家庭で暮らしている人は二十一人で、貧しい家庭は十人いる。自分の家庭は普通の生活水準だと書いた投稿は四件しかないが、全体の投稿内容を照らし合わせてみると、貧しい家庭の投稿者は少なそうに見える。

つまり、第一巻第二期の「余声」に書かれている通り、基本的に『女声』の読者は知識階層の若者が一番多く、そして時間に余裕のある中産階級と知識に飢えている労働者階級も含まれている。しかし、知識階層と言っても、当時の中国の女性教育はまだ十分には発展していないので、初等教育と中等教育までの読者が一番多くなっているのだと推測できよう。

無論、投稿者のデータを集めて『女声』の読者層を推測しただけでは、本当の読者層のデータとは離れてしまう危険性があるかもしれない。

しかし、正確な割合がわからなくても、『女声』が上海から北京・漢口、富裕層から貧困層、知識階層から労働者、女性から男性と子供まで、かなり広い読者層をもっていたことは否定できない。

### 三 「信箱」と田村俊子

さて、主に俊子が一人で担当したと言われる「信箱」には、どのような投稿が寄せられていたのか。そして、俊子はどのように女性たちに女性解放思想を伝え、中国女性を助けようとしたのか。「信箱」の投稿と回答の内容をみていく。

表1で示したように、「信箱」の内容は大体八種類に分けられる…①恋愛・結婚 ②自立・就職 ③勉学 ④家族関係・育児 ⑤貞操・性 ⑥『女声』に関する質問（アドバイス・疑問・感想文・投稿・購入など） ⑦人間関係 ⑧その他（病氣・剽窃の指摘など）。

そのうち、投稿の過半数は①恋愛・結婚に関する問題で、百十四件もある。その次に多いのは、②自立・就職の二十六件と③勉学の二十三件である。以下に各分類の中で特徴的なものを紹介していきたい。

#### 三二 ①恋愛・結婚

投稿の中で一番多いのは恋愛・結婚に関する問題である。『女声』は婦人雑誌であるため、実際に予想通りの結果だと言えよう。まずは第一巻第六期の次の投稿を見てみよう。

私は二十一歳の女性である。私の家庭は裕福で、女中を雇っていた。家の全ての家事は女中がやっていた。(中略)父が継母をもらって、家の経済権を継母に渡した。彼女は節約のためという口実で女中をクビにして私に家事をやらせた。(中略)

母の死ですでに悲しんでいる私は継母のいじめを受けて非常に苦しんでいる。結婚すれば家から離れられると思うが、旧思想の父に気に入られそうな相手が見つからない。自分で探そうともしているが、父がそれを許さないで、なかなか男性と近づけるチャンスがない。(中略)どんな方法を使えば、継母の態度を変えられるだろうか。そして、理想の相手を見つけて幸せになるにはどうすればよいか。(第一卷第六期)

投稿者の家庭は裕福で女中を雇っていたが、母親が亡くなり、新しく来た継母は投稿者をいじめている。また、旧思想を持った父親は、投稿者(娘)が結婚相手を探すことを許さない。故に、投稿者は継母の態度を変える方法、そして理想の相手を見つけて幸せになる方法を聞きたがっている。回答者は、「あなたの悩みは個人的な問題ではなく、幾千万の女性同士の問題でもあり」、「その悩みの最大の原因は経済問題である」と答えている。また、「結婚は生活の一種で、出口ではない。結婚を出口とみるなら、一つの支配者の掌からもう一人の支配者の掌に移ることになる」と述べてもいる。自分の生計を立てる技能を学び、経済的自立を実現させたら、結婚相手を探すのもやりやすくなる。結婚しても、相手に支配されないことを投稿者に強く勧めている。

回答者は家庭と婚姻における女性の問題を解決するためには、まず

経済的自立を実現せねばならぬと主張している。その主張は、この投稿に限らず、他の恋愛・結婚に関する投稿への答えにおいても繰り返され、強調されている。例えば、親に決められた結婚に反抗しがっている読者からの投稿もかなり多い。回答者は同じように、駆け落ちや家出をする前に経済的自立の問題を解決すべきだとアドバイスしている。

俊子の初期の作品の『彼女の生活』(『中央公論』一九一五年七月)でも、同じ問題が描かれている。文筆活動で経済的自立をはかった若い女性は、恋人の出現で婚期を早めた。しかし、結婚して勉学を続けようとした彼女は、家事と出産、育児などの問題で、なかなか自立できない。彼女はそれを「愛情」の代価として受け入れ、自分を騙し続ける。このように俊子は初期からすでに女性の経済的自立の問題に関心を示していた。女性を家庭と婚姻の苦悩から解放するには、先に自分で働いて経済の問題を解決しなければならない、というような俊子の考えは、『女声』時代まで続いていたことがわかる。

また、第三卷第二期には、理方君から、自分が住んでいる村では男子は皆二十才前に結婚しているので、男性と女性の結婚適齢、結婚相手を選ぶ条件について訊きたいという質問がある。回答者は、一般的に言うところ、男性の結婚適齢は二十五から三十才で、早くても二十才以降、女性は二十才から二十五才までがいいと答えている。男女とも、体と心の健全な成長を遂げてから、結婚を考えるべきだと主張している。ところが、大正五年に俊子は女子の結婚適齢について、次のように述べている。

(女性の結婚適齢は―稿者注)二十才、二十一位の年齢が相当なら

うと思ひます。丁度女学校を卒業してから、全く学校の雰囲気を離れてしまつて、一二年家庭にゐて、本当の家庭の空気を吸つたところが宜い頃です。あんまり長く家庭に馴れて了ふと倦怠が生じて来ますから、新たな刺激を他に求める内につまらない思想などに感化されると、それから後は当人の頭脳が妙に乱されて来たりして、却つて悪いと思ひます。<sup>15)</sup>

『女声』時代の俊子が考える女性の結婚適齢は、以前彼女が考えた年齢より高くなつてゐる。このような違いが生じた原因はわからないが、女性の高等教育の普及と関係があると稿者は推測している。

注目すべき点は、長く家において「新たな刺激を他に求める内につまらない思想などに感化されると、それから後は当人の頭脳が妙に乱されて」しまふ、という考えである。「信箱」の結婚問題についての投稿には、なぜ男性（女性）は結婚しなければならないのかというような質問もいくつかある。それに対して回答者は、独身主義は利己主義で、「人情も生理の原則からも合わない」、「弊刊で「独身主義」に関する文章を載せたくない」と、独身主義を強く批判している。つまり、恋愛と結婚は慎重に行うべきだが、結婚しないのは反対であるということだ。「独身主義」は、俊子の考えでは、人の頭を「妙に乱」す「つまらない思想」の一つとされている。

### 三二一 ②自立・就職③勉学

旧思想の影響で家庭と男性の支配から離れられない女性に対して、

回答者は「経済的自立」の必要性を強調している。一方、すでに就職して自立する覚悟を持つてゐる女性たちも、多くの困難に遭遇している。例えば、次のような投稿がある。

私は貴誌の愛読者で、一人の女学生である。私の家庭はかなり貧しい家庭である。（中略）私は今中学校を卒業したが、将来のためにまだ学問を続けたい（中略）しかし今私の家では口に糊することさえ難しいので、進学は無理である。進学をやめて自分で勉強しようと思つたら、本（参考書）を買うお金がない。就職しようとしても、まだ知識が足りないので無理だと思う。だから私は今毎日悩んでいる。先生は熱心で忠実な人なので、きつと私のような貧しい学生のためにいい方法を考えてくれるでしょう！（第二巻第四期）

回答者はこれに対し、今の社会における普遍的な問題であると述べている。また、勉強は学校以外でもできるので、まずは申報館の奨学金を応募したり補習学校に通つたりして専門的な知識と技能を学び、それが無理であれば古本屋で本を買つて独学するか、八仙橋の図書館でも本が読めるのでそうしたものを利用するよう勧めている。

『女声』において、右のような勉強も就職もうまくいかない貧しい青年からの投稿は多い。このような相談を受けるときに、回答者が常に言っているのは「専門的な知識」と「自分の生計を立てる技能」である。つまり、順調に就職して自立するには十分な勉強と知識が必須である。そして、意志力が強く、謙虚な人ほど自立ができる。

俊子はアメリカから帰国後に書いたエッセイで、「今後の女性は、先

づ何よりも専門的な職業に関する技術を習得することが第一に必要なことです。あらゆる方面へ向つて有能な材を自分に備へて、独立的な確実な生活の基礎を作ることです」<sup>16</sup>と、今後の日本婦人の職業への展望を述べている。そしてその展望を『女声』にまで導入し、中国婦人に発信し続けている。

回答者は、女性解放思想を読者に伝えたり投稿者を励ましたりする以外、「八仙橋の図書館」を勧めるように、具体的な情報と勉強方法も提供している。例えば、第二巻第一期の投稿者愛芬は、学校を卒業して結婚した後も学問をしたいならどんな本を読むべきかという質問をした。回答者はこれに対して、社会状況と歴史を理解し、文芸の修養を上げるべきだと言ひ、お勧めの新聞と本を紹介している。お勧めの新聞としては「申報」が紹介されている。本は巴金の「春」、「秋」、「家」と魯迅の作品、中国古代の詩が勧められている。そして、「外国の作品は中国より偉大」だから、外国の作品、例えばツルゲーネフやトルストイの作品を読むべきだと勧めている。俊子は鈴木悦宛の書簡で、自分はレフ・トルストイとドストエフスキーなどの本を読んでいることを書いている<sup>17</sup>。また、中国人編集者関露を女声社に入れた共産党地下党員の張大江は、俊子は魯迅を非常に尊重していると言っていたらしい<sup>18</sup>。そうした俊子の読書についての情報は「信箱」の回答に書かれた情報と一致している。

本の売店を開業したがっている読者からの投稿をもらった時、編集者は実際に売店や新聞社まで取材に行き、店を出すための手続き、場所、資金について色々調べてから、詳しく答えている。読者をできるだけ助けようとする編集者の努力が見える。さらに、回答者は誌面での助

言を超えて、読者に直接会って話をしようと提案している例も見られる。戦争で家が潰れ、父が亡くなり、母の体が不自由になり、残された弟と妹のために仕方がなく売春業に入った少女からの投稿である。彼女は社会に軽蔑されても前に進みたいので、自分の勉強できる補習学校と妹、弟が無料で入学できる学校を探している。回答者は「私たちはあなたのことに同情を寄せながら、尊敬している」、「私たちはあなたに会って直接話したい。何かの方法が見つかるかもしれない」と、少女に直接会って助けようとしている(第二巻第四期)。注意すべきは、戦争で家庭が潰れたという「信箱」への投稿は多いが、そうした投稿に回答する際回答者は戦争について一切触れていないということである。これは『女声』では政治的要素をできるだけ排除したいという俊子の願いのためか。

#### 三三三 ④家族関係・育児⑦人間関係

自身の問題について投稿する人が大半を占めるが、家族関係に関する質問も少なくない。その中でも特に親に関するものが多い。

私の母は知識のない婦人である。私の家庭は経済的な問題がなく、尚且つ遊惰な生活を送っているので、彼女はギャンブルという習慣を身につけてしまった。彼女は昼も夜も休まずに麻雀に溺れ、食事も決められた時間帯に食べない。そして家の全てのことと子供の教育を全部無知な江北の女中に任せる。父はもともと真面目で正直な商人で、今まで外でぶらぶらして遊ぶことはなかった。しかし、最近父

はギャンブルに溺れている母を見て、昼は仕事で精も根も尽き果て、夜は家に帰っても慰めの言葉がないと感じていた。(中略)父は何回かの遊びを経て、今は毎日遊びにいかないとけない習慣になっている。(中略)どのような方法で両親の誤りを徹底的に正せるか。そして私は如何に家庭の問題に対処し、家族全員を楽しませるか。(第一巻第五期)

投稿者は裕福な家庭に生まれた。そのため、金銭に困らない母親がギャンブルという悪い習慣を身につけ、子供と家事にも無関心になる。墮落していく妻を見て、まじめだった父親は歓楽街、ダンスホールなどの場所へ行くようになる。投稿者は家庭を守るために、編集者に両親を仲直りさせる方法を請う。回答者は、母親の習慣と趣味を切り口として、読書、裁縫など趣味を勧める。そして、親族と友人の中で母親が信頼できる人を通して母親を忠告することを提案する。

また、第二巻第三期の投稿者家餘は、自分は巴金の「家」、「春」、「秋」の中の家庭のような封建的な家庭に生まれ、家族たちの古い思想が気に入らないため、封建的な思想を持つ人と交流する方法が知りたいたと編集者に聞いている。回答者は、「今の青年たちは「春」、「秋」時代の青年よりも勇敢に奮闘し、現実を把握して苦悩を乗り越えることができるはずである」ので、勇敢になって反抗するべきだと述べている。

一方、人間関係に関する投稿では、恋愛関係を含めた異性との交友問題もあるし、誹謗中傷についての質問もある。例えば、第三巻第七期に、ダンスホールで働く女性、そのダンスホールの社長と不倫関係があ

ると職場の人たちに誤解され、不当な扱いを受けているので、自分の身の潔白を証明したいという投稿がある。このような投稿に対して、回答者は「自分が品行方正であれば、わざわざ説明する必要はない」と、投稿者たちを慰める。

### 三四 ⑤貞操・性

女性解放の問題を論じる時に、性の問題も屢々言及されている。特に貞操の問題は女性解放運動の中で、よく封建思想の一部として批判されている。「信箱」にもこのような質問がある。第二巻第十二期に、ある十八歳の女性からの投稿がある。その女性は不意に誘われ、恋人と体の関係を持った。恋人は彼女の家に縁談を持ち込んだが、二人の関係を知らないため、彼女の両親が縁談を断った。それ故、女性の恋人は遠い所へ仕事をしに行った。その女性は恋人と肉体関係を待つのが墮落だと考え、そして両親に二人の体の関係を両親に告白するかどうかを編集者たちに質問する。回答者は、まず「あなたの考えは間違っているのだ。女性が男性と肉体関係を持ったことを墮落だと思っではない」と指摘し、そして「男女関係は、心から体まで全部自由だが、真面目にやらないといけない。そうでないと、必ず損をするのである」と投稿者に忠告している。さらに、他の投稿者にいつも強調しているように、経済的独立および知識と技能を学ぶことを積極的に勧めている。第二巻第八期の恋愛関係における体の関係の問題について、回答者は同号に載せられている「貞操と一杯水の恋愛」という文章を勧めている。その文章は関露が書いたものである。文章の中では、「私たちは自由な感情

という点から貞操を批判するべきである——旧中国は貞操という観念を男性に使わない——しかし社会の利益を守り、恋愛中の人が間違った恋愛に傷つけられるのを防ぐために」、「肉体をもとにして、衝動にかられた異性の愛情を反対しないといけない」と、健全な恋愛関係の重要性について説明している。「貞操観念は下劣な考えだが、見境なしに異性と関係を持つ恋愛も不健全な恋愛である」というような主張は、「信箱」の回答にも見られる。開露と俊子の女性解放思想の共通する部分もここから少し窺えるだろう。また、避妊法についての投稿もある。回答者は現行の避妊法を詳しく紹介している。

注意すべきは、日本側において、俊子が賛助員として参加していた雑誌『青鞥』は、一九一四年から終刊にかけて、「貞操、墮胎、廃娼」論争を起こしていることである。それ以降も当時の日本の各雑誌・新聞の中で種々な議論が行われてきた。例えば、伊藤野枝は「貞操に就いての雑感」（『青鞥』五二二、一九一五年二月）で「愛を中心にした男女の結合の間には貞操と云ふやうなもの不必要」と述べる。平塚らいてうは「処女の真価」（『新公論』、一九一五年三月）で、「総ての女子は彼女が所有する処女を之れを捨てるに最も適当な時に達するまで大切に保たねばならぬ」、「適当な時にありながら、なほ捨てないのも亦等しく罪悪である」と処女を捨てる条件に言及する。これらの言説は、男女の肉体関係は「真面目」で「健全な」恋愛関係を前提とするべきだという俊子や開露の意見と通じている。いずれも男女の肉体関係を社会制度と道徳観念からではなく、恋愛関係に属する個人のものとして認識し、そして精神的な節制を保つこと、つまり霊肉一致の必要性を主張している。

### 三二五 ⑥『女声』に関する質問

「信箱」の投稿は個人の問題が大半を占めているが、『女声』の内容と作者などに関する投稿も少なくない。前期の『女声』は、まだ雑誌は模索する時期なので、雑誌の内容と編集への提案も第二巻以前に集中している。例えば、第二巻第五期では、女性の身近な問題（妊娠、育児、児童教育、衛生や服装など）を紹介するコラムと「婦人と法律常識」コラムを増やしてほしいという提案がある。回答者は、まだ投稿が少ないのでコラムを作るのが難しいが、もしスペースがあれば今後は作りた」と答えている。また、第二巻第五期には、読者が投稿しやすいコラムを増やし、短い評論や生活通雑感の投稿を多く採用してほしいという提案がある。回答者は、「非常に良い提案なので、この意見を受け入れたい」と、投稿者の提案を認めている。このような「文芸欄」の内容を増やしてほしい投稿が多いということは、第二巻第六期の「先声」にも触れている。

『女声』に掲載されている文章についての投稿は、主に読後の感想と文章・作者に関する疑問である。例えば、第一期第七巻のある投稿者は、第五期の東方明の「関与私生子」の中の遺産相続に関する説明は六法全書のどの条文によるかを知りたいと述べている。そして、第二巻第五期は丁景唐（『女声』での筆名は楽未央、歌青春など）の詩の創作手法と民俗資料の集め方を知りたい投稿者がいる。丁景唐自身もこのような質問への答えとして、「我的自省」という創作の経験と感想を論じる文章を第二巻第八期に発表している。「信箱」に一回しか載せられていな

いが、「余声」によると、『女声』のバックナンバーを購入したいという読者からの手紙が多いらしい。編集者は、『女声』は刊行後に全部売捌き所支店（外埠分銷処）へ持って行かれるので、女声社にはバックナンバーの在庫がないということを、何回も「余声」で説明している。ここから『女声』の人気度が少し窺える。

### 三六 ⑧その他

また、以上に論じた全ての内容と関係がない投稿として、剽窃の告発、病気、手紙や投稿の紛失、大家さんとのめんどろなど挙げられる。第三巻第一期の「先声」によると、『女声』からの剽窃と二重投稿の問題が大きく、「採用する前に気付いたものだけでも十数回がある。発表した後には告発されたのは四、五回である」。当時の上海文壇において、作家の不足と社会の不安定に影響され、作者たちも複数の筆名を使いまくっていた。そのため、剽窃と二重投稿は実によく日常的な問題になっていた。『女声』だけではなく、『万象』など主流な総合雑誌でも同ような問題があった。

なお、「信箱」の投稿にはこのコラムの効果を高く評価している読者が多い。

私は毎号の『女声』と「信箱」を熱心に読んでいた。故に、私は先生の婉曲な筆致、本心が垣間見える口調、威勢の良い回答によって問題が解決されているということに気が付いた。先生の回答は救いを求めている女子たちへ確かに有益な助言と勇気を与えている。（第二

### 巻第三期）

私は「女声」、特に修養欄と信箱、をいつも何回も繰り返して読んでいた。おかげで私はたくさんさんの知識を得た。今の雑誌の中で、女性を考え、女性の問題を解決しようとする雑誌はかなり少ない。本当にあなたたちの情熱に心から感謝している。（第二巻第四期）

さらに、『女声』のすべてのコラムの中で、「信箱」が一番際立っていると褒める投稿者もいる（第二巻第六期、第二巻第九期）。ただの社交辞令ではないかと疑いたくなるかもしれないが、このように多くの読者が「信箱」に手紙を寄せていることは、「信箱」は自分たちの悩みを解決してくれると信じていたということであろう。

また、第三巻第四期には、学歴が低いためうまく就職できない若い女性を助けるために、「信箱」という場で求人掲載してほしいという投稿がある。求人が掲載されてすぐの第三巻第五期と第六期の「信箱」に、応募したいと言う人が二人現れた。この二人は「信箱」のおかげで、求人情報を手に入れて、就職先を見つけたと言える。「信箱」は同じ悩みと質問を持っている女性たちを集めて、大きい連絡網を作っていた。読者たちは他人の投稿を見ながら、自分の生活や現状を反省していたのである。

### おわりに

以上、「信箱」の具体的な投稿を見ながら、「信箱」における読者と

編集者の姿を分析してきた。投稿者の情報を見ると、『女声』の読者層は、編集者たちが「余声」で推定した通り、知識階層をはじめとする社会の各階層であった。読者の年齢はおそらく十代から三十代の若い読者が多いであろう。読者の性別は女性が一番多いと思われる。しかし、投稿を見ると、大量の男性読者と、子供の読者も一部いたことがわかった。だが、投稿内容からいえば、子供の読者が「児童欄」以外のコラムを読んでいる可能性は低い。また、奥付で、『女声』の売捌所支店は三十二店舗あると書かれているが、上海に遠い地域からの投稿は少ないようにみえる。それはただの偶然か、或いは「余声」と「信箱」で何回も言及されている、戦争による交通と郵便の不便によるものか。

具体的な投稿内容は、恋愛結婚、自立と就職、勉学に関する相談が一番多い。回答者だと言われている俊子の「信箱」における助言は、彼女の初期の思想（結婚適齢など）と少し違った部分もあるが、基本的には彼女の初期の思想と一致している。女性の経済的自立、女性の教育、旧思想への反抗、健全な恋愛を前提とした性の自由など、多くの女性解放思想は「信箱」を通して『女声』の読者たちに伝えられた。また、俊子は抽象的な助言だけではなく、実際の調査をとおしてより具体的な情報を読者に伝えようとしている。さらに、貧しい風俗業の女性に直接面会して助けようとする姿勢も見せている。それは同時代の他の雑誌にはなかなか見られないことで、評価されるべきところである。

「信箱」というコラムは、『女声』の読者たちを結びつけ、読者と編集者たちのための大きなチャットルームを作った。女性たちはそこで自分の悩みを語り、他人の投稿を見て己を省みたりした。それによって、一人一人の孤立した女性是一个の団体になった。こうして、「信箱」

は人気になり、『女声』の代表的なコラムの一つになった。このように見ると、「信箱」は確かに『女声』の「女性からの声」という主旨を達成している。当時上海で唯一の婦人雑誌である『女声』は、ただの「文学性に欠けている」プロパガンダ雑誌ではなく、たとえ微力ではあっても、当時の中国婦人、特に上海婦人を助けた婦人雑誌だったといえよう。

## 注

- (1) 陳青生『抗戦時期の上海文学』（上海人民出版社、一九九五年）
- (2) 草野心平『凹凸の道…対話による自伝』（文化出版局、一九七八年）
- (3) 山崎真紀子・周珊珊（訳）「田村（佐藤）俊子における『女声』——「信箱」「余声」を中心に」（上）（下）『札幌大学総合研究』第七号、八号、二〇一五年十二月、二〇一六年三月）
- (4) 山崎真紀子「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における「抵抗」と「協力」——「私たち」の声のゆくえ」（『戦時上海グレイゾーン溶融する「抵抗」と「協力」』勉誠出版社、二〇一七年）
- (5) 渡辺澄子「田村俊子の『女声』について」（『文学』岩波書店、一九九八年三月）、山崎真紀子「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱——「私たち」の声のゆくえ」（『戦時上海グレイゾーン溶融する「抵抗」と「協力」』勉誠出版社、二〇一七年）
- (6) 第四卷第一期、第二期の「信箱」は「鴻雁伝書」に改題され、中国人編集者関露によって編集された。
- (7) 凌大峰（『女声』の中国人編集者の一人）の学校の先生応成一の娘、『女声』創刊当時、上海の中学校に通っていた。
- (8) 塗曉華『上海淪陷時期「女声」雑誌研究』（中国伝媒大学、二〇一四年）
- (9) 注8に同じ、二十九頁
- (10) 丁景唐「关露同志与『女声』」（『关露啊关露』人民文学出版社、二〇〇一年）六十四頁
- (11) 池田智恵「上海淪陷期雑誌『万象』（『関西大学東西学術研究所紀要』第四七号、二〇一四年四月）
- (12) 注8に同じ

- (13) 岸陽子「『女声』創刊号に秘められたメッセージ」(『植民地文化研究』第六号、二〇〇七年)
- (14) 注8に同じ、二百五十二、二百五十四頁
- (15) 田村俊子「女子の結婚適齢」(『婦人公論』一九一六年一月)
- (16) 田村俊子「肉体からの精神力を把握なさい」(『新女苑』一九三八年一月)
- (17) 瀬戸内晴美『田村俊子』(文藝春秋、一九八三年)を参照。
- (18) 柯興『魂帰京都…閑露伝』(金城出版社、二〇一〇年)百八十四頁

**付記** 中国語引用の訳文は全て拙訳による。原文引用の際、旧字体は新字体に改めた。

(ちょう び、広島大学大学院博士課程後期在学)

表 1

巻・期	件数	性別	年齢	職業	学歴	内容
1・4	2	女2	—	—	大学1	③1④1⑦1
1・5	3	女3	20代(1)	学生1	—	④1⑥2
1・6	1	女1	20代(1)	—	—	①1④1
1・7	3	女3	20代(1)	—	—	①1⑥1⑧1
1・8	3	女2	10代(1)	—	小学1	①2⑤1
1・9	3	女3	—	学生1	小学1、大学1	①1②1⑥1
1・10	3	女3	10代(2)	—	—	①2⑥1
1・11	3	女3	20代(2)	—	大学1	①1②1⑥1
1・12	3	女3	20代(1)	—	—	①3
2・1	4	女4	10代(1) 20代(2)	女工1、教員1	小学1	①2②2
2・2	4	女4	20代(2)	学生2	大学2	①3③1
2・3	6	女5	20代(3)	職員1	高校1	①2②2③1④1
2・4	6	女5	10代(2)	向導 <sup>(1)</sup> 女1、学生1	小学2、中学1	①3②1③2⑥1
2・5	5	女4	20代(2)	—	小学1	①3⑥1⑤1
2・6	4	女4	10代(1) 20代(3)	学生1	高校1	①2②1⑧1
2・7	7	女4男1	20代(1)	会計1、職員1	—	①3②1③1⑥2
2・8	8	女6男2	10代(1) 20代(1)	商人1	中学2	①3③1⑥2④1⑤1
2・9	6	女1男3	20代(1)	—	—	①4④2
2・10	5	女2男3	10代(1) 20代(2)	商人1、学生1	中学1	①3②1③1④1
2・11	7	女5男1	—	学生2	中学1、高校1	①6⑥1
2・12	8	女5男3	10代(1) 20代(2)	見習い1、会計1	小学1、高校2	①3②1⑤2⑧2

3・1	10	女5男5	10代(1) 20代(1)	見習い1、会社員1、 学生1	教育受けたことがな い1、中学1、高校1	①6⑥2②1③1
3・2	8	女4男3	10代(2) 20代(2)	見習い1、店員1、学 生1	中学3	①5③1④1⑧1
3・3	9	女7男1	10代(3) 20代(2)	教員2、学生1、会 社員1	小学1、中学1、高 校1	①7⑦1②1
3・4	7	女3男4	10代(1) 20代(2)	会社員1、見習い1、 学生1	小学1、中学1	①5⑧1②1③1
3・5	11	女9男2	10代(2) 20代(4)	学生1、女工1、教 員1	小学4、中学2、高 校1	①7②1③2⑧2
3・6	9	女5男3	10代(1) 20代(5)	会計1、見習い1	小学3	①4③2④1⑧4
3・7	8	女3男2	10代(1) 20代(1) 30代(1)	<sup>(2)</sup> 舞女1	中学1	①5②1③1⑤1 ⑧1
3・8	8	女3男4	10代(3) 20代(1)	会社員1、学生2	小学2、中学1、高 校1、大学1	①5②1③2⑧1
3・9	7	女5	10代(1) 20代(1)	学生2	中学1、高校1	①4②2③1⑦1
3・10	9	女4男4	10代(1) 20代(1)	学生2、商人1	教育を受けたことが ない1、中学3	①6②2⑧1
3・11	8	女3男4	20代(1)	工員1、学生1	中学1	①2②1③2⑤1 ⑥1⑦1⑧1
3・12	7	女3男3	10代(1) 20代(3)	商人1、学生2、教 員1、職員1	小学1、中学1、高 校1	①4②2③1⑤1 ⑧1
4・1	8	女5男3	20代(1)	見習い1、会社員1	—	①2②2③1⑤2 ⑦1
4・2	7	女4男2	10代(3) 20代(1)	(小)学生1、会 社員1	小学1、高校1	①4④1⑥1⑧1

注 ①恋愛・結婚②自立・就職③勉学④家庭関係・育児⑤貞操・性⑥『女声』に関する質問(アドバイス・疑問・感想文・投稿・購入など)⑦人間関係⑧その他(病気・剽窃の指摘など)。同じ投稿者が二回投稿していることもあるが、計算の便宜上、全て別件として数えている。読者の個人情報(全て投稿者が提供したものによる。なお、投稿者の性別、職業などの個人情報に言及がない場合は「-」で示した。

(1) 向導女: 遊興場や娯楽場に男性客を引き寄せさせて店の収入を増加させるサービスを行う女性。

(2) 舞女: ダンスホール経営者に客を引き付けるために雇われ、客と踊る女性のことである。